オリンピックは国威発揚の場なのか

冬季オリンピック大会がやっと終わった。テレビの一般のニュース番組までが、まるでスポーツニュースかと思わせるような構成で、日ごろからスポーツ番組をよく見る私でさえ、途中から食傷気味となった。

しかも、その伝え方で特に気になったのが、日本のメダル獲得に異常にこだわる点である。この点は、今回のオリンピック報道に始まったことではなく、近年ますます顕著になってきた傾向と言える。

私は、子どもの頃から、オリンピックに関心を持っており、関係の本なども読んでいたのだが、その中でまず記憶に残っているのは、「オリンピックは参加することに意義がある」との近代オリンピックの提唱者クーベルタンの言葉である。

そして同時に、第 2 次世界大戦前の最後のオリンピックとなった 1936 年のベルリン大会が、如何にナチス・ドイツの国威発揚のプロパガンダに満ちたものであったかも十分に知らされた。

今日、メディアがもてはやして報道する「聖火リレー」なるものも、このベルリン大会の際に始められたのだが、ギリシャからドイツに至るたくさんの中欧諸国の道路網を綿密に調査する口実となり、間もなく、ナチス・ドイツが引き起こした戦争で、ドイツ軍が大いにこれを活用したとも伝えられている。

要するに、半世紀以上前の私の子ども時代には、オリンピックは国威発揚の場であってはならないし、各国のメダル獲得数なども公式には集計すべきものでないとする雰囲気が広く存在していた。

ところが、今日、日本のメディアは競って各国のメダル獲得数を報道し、どこそこの国に負けたというようコメントまで飛び出して、偏狭なナショナリズムをあおっている。

現在のオリンピック憲章にも「オリンピック競技大会は、個人種目または団体種目での選手間の競争であり、国家間の競争ではない」と明記されており、個々の選手の勝利や敗戦を、あたかも国のそれであるかのように伝えるのは、明らかにオリンピック憲章の精神に背いている。

1936 年のベルリン大会でドイツは、金メダル獲得数でも、メダル獲得数でも、断然トップだったそうだが、その後、不幸な歴史を刻むことになったのは周知のとおりである。

オリンピック大会を楽しむのはよいが、日本の選手の勝敗に国の威信がかかっているかのようなメディアの大騒ぎはなんとかならないものだろうか。まして、この機に乗じて、選手強化に国民の税金をもっと使えというような関係者のコメントも気になる。

昨年の事業仕分けの際に、多くのメディアは総論では喝采しておきながら、削減を言われた各論の部分を取り上げては、情緒に訴えるような調子のルポをかなり流していたが、わが国が今日のギリシャのような経済苦境に陥らないためには、スポーツに限らず、個別分野の予算分捕りに加担するような報道には、十分注意する必要があると思う。